これは人外ですか？いいえ、ただの人間です(凍結)

爆走ボンバー人間

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駒王学園に通う二年の星上院　志希はいたって普通の人間である。
伝説のドラゴンを宿していたり
魔王の血をひいていたり
英雄の子孫であったり
天才的な頭脳を持っているわけでもなく
神器も持っていない
ただの人間である。
そんな人間の彼にも少し他の人とは違う事がありました。

それは家にネクロマンサーが居候している事です！
そのネクロマンサーと平凡に暮らしたい彼は徐々に厄介事にまきこまれていくのであった。

目次

平凡ってどう思いますか？ ―――― 1
やはりユーは可愛い！ ―――― 13
俺の一日を返せ!! ―――― 26
別に中二病をこじらせたとかではない ―――― 36
ごめんなさい私年下はちょっと・・・ ―――― 51
行ってらっしゃい、ミドリちゃん ―――― 63
だからこその闇討ちじゃないか ―――― 74
ゆえに俺は悪くない！ ―――― 89
あまりのバカらしさに ―――― 104
塵も残さず消し飛ばしてやるわ!! ―――― 117

平凡ってどう思いますか?

どうも読者の皆様こんにちは!
いきなりですが皆さん、平凡ってどう思いますか?
平凡なんて普通でつまらないなんて言う人もいますが
俺は平凡ほど素晴らしいものはないと思います。
学校に行って、友達と遊び、勉強して受験を受ける。
仕事に就職して、それなりの生活を送り、
結婚して家庭を持ち、定年を迎えて隠居してそれなりに
生きたあと骨を埋める。
当り前でつまらなく普通だと思われるでしょうがそれが
以外に難しく大切なのではないでしょうか?
スリルやロマンなんかなくても普通の幸せを持てる
ほど幸せなことはないと思います。
世界の命運をかけた戦いとか、倒さなければならない敵とか、
そんな情熱的なものも、たとえばいつの間にか美少女達に

好かれまくるハーレムなんてものも自分にとっては
普通に比べればクソくらえだ。
……断じてうらやましいなんて事はない！
俺の名前は星上院（せいじょういん）志希（しき）
駒王学園に通う普通の高校二年生だ！

俺は朝早く起きて朝食の準備や洗濯物を干すなど
ごく一般的な家事を終えた後に学校に向かう。
朝の気持ちいい風や日の光を浴びながら学校に行く
というのは気持ちのいいものだ。
教室に入るとクラスの女子があいさつしてくる。
「あ、志希君おはよう！」

俺は挨拶してきた女子におはよう、と返す。
「志希君この前相談に乗ってくれてありがとう!
おかげで彼とうまく行ったんだ。あ、これお礼にもらって」
そう言って女子が渡してきたのは市販のお菓子だった。
「そんな大したことはしてないよ。わざわざありがとな」
俺は女子からお菓子を受け取りお礼を言う。
俺はたまに生徒からの悩みを聞く。知っている人よりも話せることもあるからだ。最初はクラスメイトに相談された程度だったがその相談相手がすごく効果があったと言い、いつの間にか学校中に広まり今では暇なときに相談ごとや悩み事を聞いているのだ。まぁ大体は愚痴みたいなものでほとんどきいているだけなんだがな。
そのまま自分の席に着きＨＲまでのんびりして気持ちのいい時間を過ごす。

……こいつらに絡まれるまでは

「おはよう志希、早速だが見てもらいたいものがある」
「これを見ればお前も晴れて俺たちと同じ同志になれるぞ」
俺に話しかけてきたのはこの駒王学園で有名な変態三人組の内の二人、坊主頭の方が松田、通称「エロ坊主」、もしくは「セクハラパパラッチ」。
メガネをかけた方が元浜、通称「エロメガネ」、「スリーサイズスカウター」である。
この二人が俺の机に並べてきたのは思春期の健全な若者がつい使ってしまい深夜にアレをする為の物。
ぶっちゃけるとＡＶだ。
「お前ら…よくこんなものを学校で堂々と出せるな。
周りを見てみろ。女子たちが引きまくってるぞ」
「俺たちは自分に正直なだけだ！」
「欲に従わなくては人生はつまらないだろう？」
「もっともらしい事を言ってるがただエロいことが好きなだけだろうが。別に欲を出すなとは言っていないが欲を出しすぎるなと言ってるんだ」

「俺たちにエロを捨てろと言うのか！」
「エロは俺たちにとって生きがいなんだ！それが分からないのか!?」
「分からないし分かりたくもない。お前らもっと無欲になれば
そこそこいけるんだからモテルだろうに…そういえば兵藤はどうした？
あいつとでも見てればいいだろ」
「あいつは俺達を裏切ったんだ！」
「あいつはもう同志でも何でもない。ただの敵だ！」
はぁ…やっぱりこいつらの相手はめんどくさいな
目の前でエロ談義を始め出した二人に俺は内心溜息を吐く
「オースッ！おは「「死ねイッセー!!」」グボアァァ!!」
教室のドアを開けて気持ち悪いくらいの笑顔で入ってきた
兵藤に対し一瞬で二人は反応し見事な連携プレイで
ダブルラリアットをかました。そこからそれぞれプロレス技を
仕掛け始め一通り終わった後兵藤はボロボロで痙攣していた。
「おい生きてるか兵藤？死んでたらちゃんと遺体は処理して
おいてやるから安心して逝けよ」
「いや生きてるよ!!ってか遺体処理ってそうするつもりだ！」

「え？そりゃちゃんと焼いた後に山中の奥深くに
「真剣に語るな！お前結構怖いな！」
むぅ、兵藤が聞いてきたくせにこの言い草とは…解せぬ
「そういえば元浜たちがお前の事を敵とか言ってたが
何かあったのか？」
「そうだった！聞いてくれよ志希！俺…ついに彼女が
出来たんだ！」
「もしもし、精神科ですか？ここにリアルと
仮想の区別が出来ていない人がいます。カウンセリング
頼めますか？」
「っておい志希！誰がそんな可愛そうな奴だ！本当に
彼女が出来たんだよ！」
「分かっている兵藤、病院に行ってしっかりと治してこい」
「何も分かってねぇよ！本当なんだってば！」
「仮にそれが本当だとしたら…兵藤、お前何で脅したんだ」
「なんでそうなるんだよ！」
「兵藤自首して来い。弁護ぐらいはしてやるから」

「いい加減にやめろ!女の子の方が告って来たんだよ!
ほらこれが彼女の天野　夕麻ちゃんだ!」
兵藤がケータイでその子の画像を見せてくる。
黒髪のロングでとてもかわいらしい子だ。
「どうやら本当みたいだな。よかったじゃないか」
「やっとわかったか…それでお前に相談があるんだけどよ、
今度夕麻ちゃんとデートするんだけど俺デートなんて
したことないからさ。良いデートプランとかないか?」
デートねぇ…
「そういうのは自分で考えた方がいいぞ。一生懸命考えた
お前のデートプランがその子にとってもお前にとっても
良いだろうからな。まぁプランの相談なら乗ってやるから
考えて来い」
「志希…そうだよな。こういうのは自分で考えるから
意味があるんだよな!じゃあ一通りまとまったら
見てくれよ!」
「ああ、それぐらいならお安い御用だ」

絶対成功させるぞーッ！と兵藤が気合いを入れまくっているのを見てこんなのもたまには良いかと考える。

「危ない危ない、もうちょっとで買いそびれるところだった」
俺は学校の帰りにスーパーで主婦たちの戦い「タイムセール」で特売の卵と玉ねぎを手に入れ戦いに勝ったところだ。
家計を少しでも軽くする為に大事なことだ。
気分良く暗い夜の中を帰宅しようとしていたところ前方からふらふらとおぼつかない足取りの女性が来た。
俺はあえて女性に話しかけた。
「大丈夫ですか？ふらふらですけど…」

「すいません少しおなかが減ってしまって…失礼ですが
何か食べ物を恵んでもらえませんか?」
「俺が持っているものであれば良いですよ」
女は口元をゆがめ
「ありがとうございます!じゃあ

アナタノカラダデ」
女の背中から蜘蛛の脚のようなものが生え先程までとは違い
でかい蜘蛛の姿に変わる。
「ワタシハぐれ悪魔アルケミ、それじゃ
イタダキマース!」
蜘蛛の化け物は俺を食べようと襲い掛かってきて
目の前までやってくる。

だが

グシャッ!!

あと少しで俺に届くといったところで蜘蛛の化け物は
もっと巨大な寅に叩き潰されぺしゃんこになった。
「食材は無事だな、よくやったな」
その寅の頭をなでてやると気持ちよさそうに目を細める。
そのあとこの化け物の肉片や血をそのままにしておくわけには
行かないのでしっかりと処理してから家に帰った。

これはそんな大した話ではないが俺の家は今身内では
俺一人である。

「ただいま」

だけど

『おかえり』

俺の帰りを待ってくれる家族のような存在はいる。

リビングで俺を待っていたのは輝くような銀髪の
ストレートヘアにサファイアのような青い眼、
西洋の鎧のような兜、ガントレット、胸当てを

着ていて静の雰囲気をまとった少女だ

「ああ、ユー」

やはりユーは可愛い！

リビングで待っていたユーはメモ帳にペンを走らせ俺に見せる。
『お腹すいた。早くご飯』
「ごめんな、遅くなって。今日は卵が安かったからオムライスだ」
『楽しみ』
これが俺とユーのいつもの会話だ。何でユーがわざわざメモ帳で話すのかも俺はその理由を知っているからこれが当り前なのだ。
キッチンに入り買ってきた食材と冷蔵庫から必要なものを取り出し調理にかかる。
俺が調理している間、ユーはリビングでお茶を飲みながらバラエティー番組を見るか、暇になったら手伝いをしてくれるかのどちらかだ。…どうやら今日はテレビを見て待つようだ。
そんなことを考えながらも手は休まず調理は進んでいく。
料理が出来たのでリビングに運ぶ。ユーは相変わらず無表情だが、料理を今か今かと楽しみに待っている犬のように見えた。

もし尻尾があったらパタパタと振っていると思う。

「グフッ!!」

ヤバい

一瞬その姿を想像してしまい、あまりの可愛さに悶えてしまう。

俺はユーを見慣れてるからそのギャップの破壊力は凄まじい物だ。

常人ならこれで昇天してると断言できる。

これに甘えるような声でも足されでもしたら自分は間違いなく

鼻血による出血多量で失血死していたところだろう。

『どうかしたの志希?』

俺の様子が変なのを見たユーがそう尋ねる。

イカンイカン、冷静になれ俺。ユーに心配をかけてどうする?

平常心だ平常心。

「別に何でもないさ。相変わらずユーは可愛いと思っただけだ」

周りからしたら口説き文句のようなセリフだろう。

だがこれは嘘でもなんでなく志希の本心なので尚性質が悪い。

だがこれを聞いたユーは
『そう。それならよかった』
変わらずに無表情でそれだけ返し出されたオムライスの方に向く。
今のユーにとっては志希の口説き文句よりもオムライスの方が大事なようだ。
まぁ志希も志希でそんなつもりで言ったわけではないので特に気にしていないようだが。
そして志希とユーは向かい合うように座り合掌する。
「『いただきます』」
二人は食事のあいさつ（一人はメモ帳だが）をして食べ始める。
「どうだユー、おいしいか？」
『とても美味しい。やっぱり志希の料理はおいしい』
「まあ料理だけは誰にも負けない自信があるからな。知ってるか？料理をおいしくさせる最高の調味料」
ユーはしばらく顎に手を当て考えを書く。

『セニョサザミのカニ味噌?』

「いや違うけど、ってか何それ?俺聞いたことないんだけど」

『冥界の辺境に住んでると言われている幻のカニ。
そのカニの身は黄金の輝きを想像させ一度食べると
病みつきになりさらに食べたいと思わせる魔性の味。
さらにそのカニのカニ味噌は他の料理に混ぜるだけで
頭がすっきりとして疲労を回復させるが、幻覚を
見るようになったり急に叫びだしたり果てには
いつの間にか神隠しにでもあったかのように消える
謎の調味料』

「いや何それ!?ただの危ない薬じゃん!
そのカニただの麻〇の塊のようなものじゃねえか!
そんな怪しい調味料出すわけないだろ!!」

『ちなみに通販で5個入りセットで送料無料で
３００円という破格の安さ』

「通販でとれるのかよ!全然幻じゃないじゃん!

普通に出回ってるじゃねえか！ってか３００円って
いくらなんでも安すぎだろ！完全に売れてない
証拠じゃねえか！」
ぜぇぜぇと息を吐きながら一気に突っ込みしきった
志希。ゆっくりと深呼吸をして息を整えていた。
『まぁ冗談はこのぐらいにして』
笑えねえ冗談だよと内心つぶやき苦笑する志希
『私にはよく分からない』
「ま、今に分からなくてもユーにもそのうち
分かるようになるさ」
『答えは教えてくれないの？』
「こういうのは自分で見つけるから意味があるんだよ」
『確かにその通りかも』
「その答えを見つけるためにもユーも料理してみないか？
俺が教えてやるからさ」
俺の提案にユーは『考えとく』とだけ返した。
確かに答えはあるがそれはやっぱり自分自身で考えなきゃ

意味がないからな。
……決してユーの手料理が食べたいからというわけではない。
断じて違う!!

その後バラエティー番組を見ながら黙々とオムライスを
食べユーが3回ほどおかわりをして食事を済ませた。
ユーが風呂に入って行くのを確認してその内に
食器の片付けを済ませ暇を持て余していた時
プルルルルル!プルルルルル!
電話が鳴った。
「もしもし、星上院ですけど」
〔あ、志希か!悪いなこんな夜に〕
「いや、ちょうど暇だったからいいぞ」

〔そうか？なら良かった。それで学校で話した
デートについて何だけどさ、一応考えたんだけど
やっぱりちょっと不安だからアドバイスくれないか？〕
「ああ、俺でいいならアドバイスしてやるよ」
〔ほんとありがとうな志希！えっと最初は
近くの公園で待ち合わせをして……〕
その後兵藤から細かくデートのプランを
聞かされちょっとありきたりすぎる感じも
したが初めてのデートならこれぐらいが
ちょうどいいだろうと思った。
〔今日はほんとにありがとな志希！〕
「お前そのセリフ何度目だよ。別に
いいって言ってるだろ」
〔あ、ああわかった。じゃあデートの
結果楽しみにしててくれよな！〕
「期待しないで待っとくよ」
ひでぇな！と言いながらも兵藤はどこか

満足した感じで電話を切った。
『誰かと話してたの？』
いつの間にか後ろには風呂から上がって
いたユーがいた。風呂上がりで濡れた銀髪が
さらにその輝きを主張しており綺麗だった。
…何度目かはわからんがやはりユーは可愛い！
まぁそんなことは顔には決して出さないが
「ああ、学校のクラスメイトと話してたんだ。
デートプランの相談に乗ってくれって
言われててな」
『そのクラスメイトって……』
「ああ、神器（セイクリッド・ギア）を宿してる奴だ。まぁ、特に
強い力は感じなかったけど…少し妙なんだよ」
『どうかしたの？』
「いや、さっきも言ったけどそのクラスメイト…
兵藤からデートプランの相談に乗ったんだが

相手がこの町に潜伏してる堕天使なんだよ」
別に堕天使がどこで何してようと害にならない限り関係ない。
人外と人との恋もそう珍しい事ではなく、実際にそのまま成就した例もある。だがこの町に居る事自体おかしいのだ。
『確かに変。ここはグレモリーの領地。そんなところに堕天使が侵入しているということは……』
「三大勢力の停戦状態に影響を与える、下手したら戦争になる。
兵藤の話によると「一目惚れで告白された」と言っていたが
こんなところにわざわざ来るということは何か目的がなければ
わざわざ来ないはずだから兵藤に近ずく為の口実だろう。
兵藤の神器がめあてによる上からの命令か？…」
『それはない』
『堕天使総督のアザゼルは無闇に戦争を起こすような危険な事はしない。もしそうだとしても悪魔に気付かれないようにもっと上手く隠す』
「そうだよな。ってことはアザゼルの知らない所による

部下の暴走ってところか。だけど兵藤からは特に強い力は感じなかった。まぁあいつの力が弱過ぎて感じないだけかもしれないし…考えられるのは……」

1．実は兵藤の神器がすごい物だから
　勧誘ｏｒ危険だから抹殺！
2．この町に何か重要なものがあるからその調査！
3．この町に他に目的があり兵藤の神器が邪魔だから抹殺！
4．本気で兵藤に恋をしている!!

大体この四つのうちのどれかだと思うが…

「まぁ2と4は確実にないな！2なら俺たちが気付かないはずがないし悪魔の領地に侵入するほど重要なものならもっと上手く隠すだろうしな…4はさっき言った通りだ」

『本当は？』

……ん？

「ユー？それはどういう意味だ？」

『4の可能性が完全にないとは言い切れない。でも志希は絶対にないと言った。でも4はその堕天使が本気で恋をして危険を犯して来たかもしれないのに絶対にないと言った。何故？』

ユー、なかなか鋭いな

「それは…兵藤は学校では知らないものはいないほどのド変態だからな！そんな奴を好きになる物好きはいないだろ」

『彼女はその物好きなのかもしれない。それに志希は一目惚れされたと言っていたから学校の事は関係ない』

……

『彼女がいない妬み？』

「ないな！妬みなんてそんな馬鹿馬鹿しいこと！それに俺だって彼女作ろうと思えば一人や二人簡単に…はい、そうです。妬みです、はい」

否定しようとしたがユーの目が冷たい物になりすごく怖くなったのであっさり白状してしまった。

だって俺だって年頃の男だよ！彼女いないしましてやあの「おっぱい魔人」と言われてる兵藤だぞ！そんな奴に先越されたとか納得できるか！

「ま、まぁこの話は置いといて…1も少し可能性は低いだろうな。勧誘するにしても兵藤自身も神器に気付いてないぐらいだしよっぽど特殊な事でもない限り覚醒しないだろうし、殺すならもっと上手く隠ないと勢力同士の関係を壊しかねない」

『だとしたらやっぱり3で部下たちの暴走？』

「一番可能性が高いのはそれだろうな。でも何が目的かまでは今のところわからないな」

『仕方ない。情報が少なすぎる』

「こればかりは今のとこどうしようもないな…まぁデートのとき兵藤の初々しい反応でも見て楽しみながら死なないようにぐらいはしてやるか」

『デート見るのがほとんど目的のつもりでしょ？』

「…ユーってもしかして人の心読む能力とかある？」
『そんな能力はない。
なんとなく志希の考えてることはわかるだけ』
・・・それはそれで怖いです、ユーさん

俺の一日を返せ!!

突然ですがあなたは休日に何をしますか？
休日は学生も大人も貴重なものだ
学友とどこかに出かけて買い物をしたり
遊びに出掛けて一緒に遊んだり
はたまた勉強をする人もいる
恋人と映画や喫茶店に行って大切な人との時間を過ごしたり
部活で仲間と共に互いで研磨しあい練習に励んだり
アルバイトなどをする人もいる
家庭を持ってる人なら自分の子どもと遊んだり
家族でどこかに出かけて家族との時間を大切にしたり
または休日はゆっくりと休みだらだらと過ごしたいという人もいる
人それぞれによって休日の過ごし方は変わりどう使うかも変わってくる

休日は数少ない貴重なものなのでぜひ有意義に使わないと勿体無い
欲しいと思ったときにないかもしれないしな
え？俺は休日をどう過ごしてるかって？
休日によって色々変わってくるが…今は

「じゃ、じゃあ夕麻ちゃん！行こうか」
「う、うん！イッセー君！」

クラスメイトのデートを尾行している

いや俺だって好きでこんな事してるわけじゃないんですよ
大体何で休日だって言うのに他人のデート見ないと
いけないんだって話ですし、わざわざ人がイチャイチャしてる
所見るとかそんなんだったら家でユーと過ごしてる方が
百万倍ましだよ!!
堕天使が何を企んでるのかはもう調査済みで俺には関係ないからどうでもいいんだ
が
一応知り合いでもある奴が死ぬとなると寝覚めが悪くなるからな
まぁ他にも理由があるが今はそれでいいだろう
だが俺の休日をこんな事に費やすことになった原因であるこのクソ堕天使は
後で俺の名の下の私刑を執行する予定だ
後兵藤もなんかむかつくから学校で殴るか
エロ行為を未然に防いだという大義名分なら大丈夫だしな

ちなみにユーは興味がないとのことで家で俺が作ったご飯や

デザートを食べながら留守番してます
ついでに甘味屋で羊羹買うように頼まれました

チクショウ！何が悲しくてこんな事しなくちゃなんねぇんだよ!!

ユー!!羊羹は買ってやるから楽しみにしてろよ！

時間をすっ飛ばして夕方
デートは終わりに近づいていた
ここまでで特に堕天使は行動を起こしていない
まぁ言うことがあるとしたら周りから見たら
付き合い始めた初々しいデートであったが
兵藤が偶に下心丸出しのキモい顔になって

大変不愉快だった
天野の方はその事を気づいていない振りを
しておりあたかも楽しんでいるように見せていた

まぁ一応アレも用意しているから大丈夫だと思うが

そして最後は最初に待ち合わせをしていた公園に
戻ってきた。
行動を起こすならそろそろ…とか言ってる内に人払いの結界
張ってるし
結界の中で誰もいない中、近くの木に隠れ兵藤たちの会話を聞く

「ねぇイッセー君、私のお願い聞いてくれる？」
「な、何？夕麻ちゃん」

またイッセーの鼻の下が伸びてる…まぁキス的なものでも
期待してるんだろうな

一般の客観的な目から見ても良い雰囲気でいかにもキスシーンのような景色だしな

…まぁ

「じゃあ……死んでくれないかな?」

違うんだけどな

「…えっと、ごめん夕麻ちゃん。もう一回言ってくれないかな?」

「死んでくれないかな」

確認を取る兵藤に天野ははっきりと告げる

まぁ付き合ってる奴にいきなり「死んでくれ」なんて言われても
普通戸惑うわな
そして天野は人間の姿から背中に黒い羽を出し露出の高いボンテージ
姿に変わる
…非常に眼福なのだが何故わざわざあんな露出の高い服にする？
痴女なのか？
などと考えていると天野は光の槍を構えた
懐からあらかじめ用意しておいた術式を書き込んだお札を
取りだし兵藤に投げる
光の槍よりも先にお札は兵藤に張り付き次の瞬間

兵藤は光の槍によって腹を貫かれて倒れた

兵藤も天野も俺が投げたお札には気付いていなかった

「怨むならその身に神器を宿させた神を怨むのね」
そのまま天野は満足したように飛び去って行った

さて俺も目的は果たしたし羊羹買って帰るか！
俺が帰宅しようとした直後魔力を感じまさかと思い兵藤の方に
振り向くと転移の魔法陣がありそこから駒王学園の生徒なら
知らぬ者はいないだろう学園の二大お姉さまの一人で特徴的な真っ赤な
髪を持った「リアス・グレモリー」が現れた！
グレモリーは兵藤の姿を見て助からないと思ったのだろうが
意味ありげな笑みを浮かべた後、チェスのポーンの駒を取り出した

（え?･まさか・・・）

俺の考えた予想は当たりチェスの駒８つが兵藤の体に入った

（はあああああああああ
!!!???）

兵藤に８つも駒を取り込んだのも驚きだがそんなことは
どうでもいい!!
この女！今まで何もしてなかったくせに今頃動いて
おいしいとこ持って行った挙句、俺のやった事全部台無しに
してくれやがった!!
今日の俺の尾行もわざわざ用意した術式も意味ねえじゃねえか！
俺の一日を返せ!!
今にも叫んでやりたい衝動を何とか抑えている間にグレモリーは
兵藤を連れてその場を去って行った

…俺、何してたんだっけ？

そのあと家に帰ったが羊羹を買い忘れユーは怒っていなかったが
とても残念そうにしていた
後日ユーには羊羹と団子を買ってあげた

今度あの堕天使半殺しにして甘味代と迷惑料を巻き上げると
固く決心した志希であった

別に中二病をこじらせたとかではない

イッセーside

よう！俺イッセー！この小説で初めての俺の視点だぜ！

俺はあの日夕麻ちゃんとデートした日、実は堕天使だった夕麻ちゃんに俺の中に眠る神器のせいで俺は殺されたがそこに学園の二大お姉さまの一人リアス先輩に悪魔に転生することで命の危機を救ってもらって今は部長の謇族悪魔として頑張って働いている。

全ては上級悪魔に昇格して自分の謇族、ハーレムを作るためだ！

今は一番下っ端だけどいつか俺はハーレム王になってみせる！

それに悪魔の活動であるオカルト研究部もイケメン王子を除けば最高だしな！
二大お姉さまのリアス先輩、部長はもちろんもう一人のお姉さまであり大和撫子の姫島朱乃先輩もいてどちらも大きく素晴らしいおっぱいをお持ちの方だ！
もう一人は一年で後輩の塔城子猫ちゃん！学園のマスコット的存在でとてもかわいらしい！
こんな人達と一緒の部活に入れるなんて俺は本当に幸せ者だ！
それで今日はいつもと違う部活になったらしく
今俺達オカ研は町の廃墟に来ていた

「イッセー、今日はあなたに駒の特性を教えるわ。
悪魔としての戦いを経験しなさい」
「マ、マジッすか!?お、俺、戦力にならないと思うんですけど！」
「そうね。それはまだ無理」

う・・・ここまではっきり言われるとちょっとへこむな
「でも悪魔の戦闘を見ることが出来るわ。今日は私達の戦闘を
よく見ておきなさい」
つまり見学ってことか…よし部長の役に立つためにもちゃんと
勉強しなきゃな!
「ところで部長、俺の駒ってなんですか?」
「そうね、イッセーの駒は・・・」
「・・・血の臭い」
部長が答える前に子猫ちゃんが鼻を覆いながらそう告げる
特に何も臭わないけどな?
「みんな!どこから来るかわからないから注意しなさい」
みんなの目が変わり雰囲気も変わる

い、いったいどんな奴がいるんだ?

だがいくら探しまわってもはぐれ悪魔とやらは

見つからなかった
残っていたのはまだそんなに時間のたっていない
血痕とはぐれ悪魔に殺されたであろう人の
骨だけだった

部長ははぐれ悪魔が何者かによって討伐されたか逃げ出したと判断し、
警戒をするように部員たちに伝え解散となった
でも一体はぐれ悪魔とかはどこに行ったんだ？
俺のこの疑問は晴れる事はなくそのまま家に帰った

グレモリー謇族が廃墟に来る1時間ほど前

志希ｓｉｄｅ

俺こと星上院志希は夜の廃墟に来ています
それも黒いローブに狐のお面をかぶって

別に中二病をこじらせたとかではない
ここをはぐれ悪魔が根城にして近くの人間を誘いこんでは
食事を行ってると聞いてそいつを討伐しに来たのだ
本来ならここを管理しているグレモリーの仕事なのだが
いつまでたってもはぐれ悪魔を狩らないしそもそもこの町は
他の地に比べてはぐれ悪魔の数が多い
グレモリーはこの町を領地として魔王から言われてるらしいし
何よりもあの女は魔王の妹である
そんな自分の領地にはぐれがこないとでも思っているのだろう
いかにも温室育ちのあまちゃんが考えそうなことだ
正直グレモリー達と接触したら面倒なことになるからあまり
痕跡が残るような事は避けたいんだがこのまま放っておいたら

犠牲者が増えるため仕方なく来たのである
もし接触しても顔が分からないように狐のお面をかぶっているのである
ついでにこのお面は祭りでもらったものである

そして廃墟に入っていくと声が聞こえた

ああ、またあの怪物の犠牲者が、このままじゃこの可愛そうな人も…

声の聞こえた方向には白い着物を着た女性がいた
だが普通の人とは違い生気が一切感じられず脚が途中から
透けていてなくふわふわとしている

勘が良い人は既にお気づきであろうがこの女性は俗に言う幽霊である

え？何でそんな自然体なのかって？

そりゃあずっと見てきたんですから驚けと言われても無理な話だ

俺がその女性を見ていると女性が俺の視線に気づいた

〈あれ？この人、私を見てる？……いやそんなわけないか。

幽霊の私が見えてるわけが…いやでも完全に私を見てるよね。

後ろなんにもないし…あの～私の姿が見えますか？〉

「ああ、はい見えてますよ。ばっちり」

女性に返事をすると目を見開いていた

〈ほんとに私の姿が見えるんですか!?じゃあこれいくつですか？〉

女性は指を三つ立てたので三と答えると女性は嬉しそうに

ぴょんぴょんとはねる。脚はないが

〈わぁ～ほんとに見えるんだ！霊能力者ってやつ？まぁそんなことは

いいや！今まで他の人に呼び掛けてもみんな気付いてくれないから

寂しかったんだよねぇ～〉

本当にうれしそうに女性は笑顔を浮かべながら周りを
ふわふわと飛び回る
「ついでにあなたが俺の事を可愛そう呼ばわりした事も
しっかり聞こえてましたよ」
〈あ、あれは…だ、誰にだってその人自身の個性というものが
あるから…その…〉
「フォローになってませんよ…まぁこんな格好してたら
そう思われても仕方ないですけどね。そんなことよりも
聞きたいことがありますが良いですか？」
〈（そんな事なんだ…）聞きたいことって何？〉
「ここにいる怪物とやらはあれですよね？」

俺が指を刺した方向の暗がりに何か動いている者がおり
それに気付いた女性はあわてだす
〈そうだった！あなた早くここから逃げて！でないと
あいつが……！〉

「忠告はありがたいですがもう遅いみたいですよ」

「おいしそうな臭いがするぞ、でもまずそうな臭いもするぞ」

〈お、遅かった…〉

暗がりから姿を現したのは上半身は女の体で下半身は獣のような
ものでとても醜いものだった
「ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ！」
「うわぁ～気持ち悪！上半身女でも下半身があれって最悪だわ」
〈そんな呑気なこと言ってる場合！死んじゃうわよ！〉
「え？ああ、俺は大丈夫ですから気にしないでいいですよ」
危機感ゼロの俺に女性が逃げるように言うが断る

逃げたら俺がここに来た意味がない

「おいそこのはぐれ悪魔、とっとと終わらせたいから早くかかってこい。
時間の無駄だ」

「人間ごときがこの私に勝てるとでも？生意気な…なら望み通り
今すぐに食ってやるわ！」

悪魔は俺に向かってその手に持つ槍を俺に振りおろすが
後ろに後退して避け、呪符を取り出し詠唱する

【我と契りを結びし十二の獣よ　我の導きに応え馳せ参じよ
十二支の寅　琥徹！】

詠唱し呪符を投げると呪符が光り形が変わっていき
どんどん大きくなっていき

グルルルルル・・・・

雷を纏う巨大な虎へと変化した

「琥徹、やれ」

短く伝えると琥徹はそれに応えるようにうなずく

「な!?貴様神器持ちか!こざかしい!」

悪魔は一瞬琥徹の威圧感にひるんだが琥徹に向かって

槍を振るう

が

バキン!

槍が琥徹に当たると槍の方が砕けてしまった

その事に体を硬直させた悪魔を琥徹は前足でごみをどけるように

悪魔を叩く

「ごばあぁぁ!!」
だがそれだけで悪魔はものすごい勢いで叩き飛ばされ琥徹の
前足で止められる
「ゴフッ!ガホッ!ゲフッ!も、もう、止めグボアァ!」
球を転がすように弄ばれる悪魔だがやられている者にとっては
ハンマーで何度も殴られているようなものなのだ
何度も殴られていくうちに腕や脚などがあり得ない方向に
曲がっていたりたまたま爪の部分に当たったところは肉が
裂け血を流し腕が弾け飛んだ

「琥徹、待て」

それだけ言うとピタッと琥徹は球転がしを止めなめた手で顔を洗う
悪魔の方は元の原型が分からないほどボロボロだった
殴られた跡は凹んでいる青く腫れあがっており
裂けた肉からは絶えず血が流れ続けている
「い、ガア、たず、げでぇ…ひゅるじて…くらはい…」

「まだしゃべれるのか、結構タフだな」
本当、ここまでボロボロなのにまだ
俺はそのまま悪魔に近づいてくと悪魔は口元を三日月状に釣りあげる

「オ、マヘモ、ヒネ、ェェ！」

背後からは弾け飛んだ腕が俺を貫こうと迫ってくる
「本当に、ここまでボロボロなのに…」

グシャッ!!
迫った腕は俺の腹を貫く

「…まだ動けるとは大した執念だよ」

腹を貫く事はなく琥徹によって呆気なく潰された
「そ、そんは、はがは…」
「さて、最後の茶番にも付き合ったし終わらせるか」

俺は新しい呪符を取り出しさらに悪魔に近づく
「ヒッ！イヤ、ハ、ヒニハク…ハイ…」
そんな悪魔の命乞いを俺は無視し詠唱を始める

【穢れなき聖なる刀よ
我の前にある悪しきものを消しさる刃となりて我の導きに応えよ
霊刀　月読！】

すると呪符が光り形を変え刀に変わる
その刀の刃は穢れを消しさるオーラが纏われていた
その刀、月読の柄を握り切先を悪魔に向ける
「タ、タス、ケヘェ…」
「ヤダ♪」
未だに命乞いをする悪魔に笑顔で断り刀を振りぬき

斬り裂く

斬られた悪魔は一瞬で浄化され消滅した

「討伐完了っと、さて次は…」

月読を呪符に戻し隅で隠れていた霊の女性の方を見る

「あの人の番だな」

ごめんなさい私年下はちょっと・・・

〈キャーかわいい！毛なみももふもふで最高！あ～ずっとこうしてたい、
これ無しじゃもう生きられないわ！もふもふもふもふ！〉
「いやあんたもう死んでるでしょうが」
あ、どうも星上院志希です
今成仏させる為に琥徹をもふもふさせてます
式神である琥徹なら幽体でも触れられるのである
え？何でもふもふさせてるかって？
まぁ説明が面倒くさいので回想で説明します

いろいろなんやかんやあってはぐれ悪魔を倒した志希であった
え？説明が雑い？詳しく知りたい方は前回の話を見てきてください

簡単に言うとグレモリーがはぐれ悪魔を倒さないから被害が増える前に
俺がわざわざ討伐しに来たのである
結局説明してるって？説明しろって言うから説明したのに
なんで文句言われるんだ？
ゴホン！話が逸れてしまいましたね
じゃあ今度こそ回想入ります

はぐれ悪魔を倒した次に俺が狙ったのは幽霊の女性だ
彼女と喋る前に琥徹がちょっとデカすぎるので小さくする
「琥徹ちょっと小さくなってくれ」
琥徹はガウ！と軽く頷くと琥徹の体が光に包まれどんどん小さくなっていき

犬サイズぐらいにまで縮んだ
〈こ、これは…！〉
「まぁ驚くのも無理ありませんがまずは俺の話を
〈かわいい!!〉って言ってるそばから聞いてない！」
幽霊の女性はミニ琥徹に飛びつき撫で撫でしていた
〈ねぇもふもふしていい？いいよね！ね！〉
「いやだから俺の話を〈ダメなの？〉ウッ！」
こ、これは男のほとんどが必ずと言っていいほど聞いてしまう
噂の涙目上目遣い！この人、なんて高等技術を！
だが甘いな　この程度で俺は負けるわけが
「別にいいですよ」〈わぁ～ありがとう！〉
負けちゃいました　ダメですあんなのに勝てるわけがない
あれに勝てるのは枯れてる奴とホモだけだ！
〈もふもふだぁ～！〉
「ガウウ！」
どちらも大変気に入ったようである

はい！というわけで最初に繋がりました
え？なんで成仏させるか説明してない？
すみません今からするのでお待ちください
〈ねぇ君さっきから何一人で喋ってるの？やっぱりあなた可哀想な
「違います至ってノーマルですから忘れてください」そ、そう〉
危ない危ない　もうちょっとで本当に可哀想な人と思われるところだった
「話が逸れていましたがこれはあなたにとっても大事な話なので
よく聞いてください」
〈大事な話って…ごめんなさい私年下はちょっと…それに私死んでるし〉
「告白じゃありませんよ!!しかもなんか振られてるし！告白してないのに
振られるってなんかすごく虚しい」
〈ごめんごめん冗談冗談！ちゃんと聞くから！〉

「ちゃんと聞いてくださいよ、それでは…！」
やっと話そうとすると今度は近くに悪魔たちが転移してきた
「またか！また邪魔が入った！何で俺が話そうとすると邪魔が入るんだよ！
ってかまたあいつか！毎回遅いくせに何で狙ったように俺の邪魔すんだよ！
嫌がらせかこの野郎！話進まねぇよ！読者もいい加減にしろってカンカンだよ！」
〈そんな堂々とメタ発言しちゃダメだよ！しかも今回私邪魔してないよ！〉
「あ、ああ、すいません取り乱しちゃいました。邪魔したのはあなたではなく
これから来る悪魔ですよ」
〈え、悪魔ってさっきの化け物と同じやつってこと？〉
幽霊の女性は首をかしげながら聞いてきた
あんまり驚いたり怖がったりしないな、自分を殺した種族なのに
「いえ種族は一緒ですがあんな化け物ではありません。でも少し面倒な
ことになるので場所を移しましょう」
〈わ、わかった〉

そのまま俺たちはグレモリー眷属に見つからないように裏口から
簡単に脱出することが出来た。

それにしても逃げ道も塞がないって…罠かってぐらい簡単に脱出できたぞ
本当にあんなのがキングでいいのか？もうキング（笑）じゃないか

「ただいまユー、ごめんちょっと遅くなった」
〈お邪魔しまーす！〉
家で話す為に連れて来たがこの人全然遠慮がないな
まぁ別にいいけど
『おかえり志希　お客さん？』
「ああ、そうだ」
〈この子も私の事が見えるんだ！嬉しいな！ねぇ！あなたの名前は何？〉
『私はユー、ユークリウッド＝ヘルサイズ』

〈ユーちゃんか！私はミドリ、長田　ミドリ！よろしくねユーちゃん！〉
長田さんはニコニコとユーに笑顔を向け話しかけユーは無表情だが
どこか楽しげだった
まぁ女同士、何か感じるところがあるのだろう
ユーも俺以外とはほとんど人と話す機会がないからな
俺とユーは座布団に座り長田さんの分も出しそこに
座る。浮いているが
「二人とも話してるとこ悪いけど大事な話があるからいいかな？」
〈そうだったそうだった忘れてた！〉
忘れてたって、この人
「では今度こそ長田さ〈ミドリでいいよ！〉ミドリさん、大事な話しをするので
よく聞いてくださいね」
〈分かった！ちゃんと聞くね！〉
「では話しますね。ミドリさん
あなたには成仏してもらいます」
〈うんいいよ！〉
ガタンッ！

あまりの即答に柄にもなくズッコケてしまい卓袱台に顔からぶつかる
〈大丈夫?〉
「大丈夫です、いきなりの即答に少し取り乱しただけですから」
我ながら落ち着いた返しだ
最近驚きの連続だから持ち直しが早くなったという嬉しくない
成長である
ユーは……!!??
俺は今、信じられないものを見てしまった

ユーが…一瞬だが口元を抑えて震えていた!!
「ユー、お前今笑って『笑ってない』いや絶対笑って『笑ってない』
いやでも『笑ってない』…」
頑なに認めないユー、だが今日は良いものが見られた
まさかユーが笑うところを一瞬でも見られるなんて、赤飯ものだ

〈ねぇ大丈夫？顔がすごくにやけてるよ〉
若干引いている様子でミドリさんが言ってきた
おっとダメだダメだ、あまりのことに顔に出ていた
「すみませんあまりのことに動揺してしまいました」
〈そ、そう。でも確かにユーちゃんあんまり笑わなさそうだもんね〉
『だから笑ってない　それに話が逸れている』
「ああそうだった！本当に良いんですかミドリさん。成仏するってことは
自分が消えることを意味すんですよ？」
〈ん～私も流石にそろそろ成仏して一歩を進まないといけないと思ってね。でも…
「成仏ができない、と」そうなんだよねー〉
「まぁ簡単に成仏なんてそうそう出来ませんからね。それじゃあ
ミドリさんの未練は何ですか？この世に縛られるほどの強い未練です」
〈うーん未練か、

お婆ちゃんにお別れを言えなかったこと、かな？〉

〈私の両親は私が小さい頃に事故で亡くなって以来ずっと
私の親代りをしてくれてとっても優しいお婆ちゃんだったの！〉
〈でも私が死んだあの日、お婆ちゃんが倒れたって聞いて私は
心配で気が気でなくて急いで病院に行こうとあの廃墟の前を
通った時、気づいたら廃墟の中に入っていてあの化け物に会って食べられちゃった
の。
それで気づいたらこんな姿になってたの〉
「そうですか、お婆ちゃんに会えないまま死んでしまいそれが
心残りで魂がこの世に縛られてしまったんですか」
霊になった人のよくあることであるがそれだけにこの世への
未練も強くそして叶えにくい未練だ
伝えたいことがあっても普通の人には幽霊を見ることも話を聞くこともできない
文字などで伝えようとしても心霊現象などになり上手く伝わらなかったり
上手くいったとしても生きている人にとっては死んでいる人からのメッセージは

ありえないと受け入れることが出来ず拒絶されてしまうのがほとんどだ
〈幽霊になってもおばあちゃんの病室に行こうとしたけど
なぜかあの廃墟から離れられなくて…今覚えば何で
こんなところまでこれたんだろう?〉
「ああ、それは多分あのはぐれ悪魔の放つ魔力が原因ですね。
普通の魔力とかならそんな事はないんですけど、異形化した
はぐれ悪魔が持つ魔力は負の気が強いので負の濃度が強すぎて
あそこに縛られてたんでしょうね。俺が浄化したので出てこれたんですよ」
〈へぇ～そうなんだ!じゃああなたも魔力を持ってるの?〉
「いやただの人間である俺は魔力は持ってませんよ。
その代わり霊力を持ってるんですよ」
〈霊力?〉
「主に五行や結界術、式神なんかを使役する力です」
〈それじゃあ琥徹ちゃんも式神なの?〉
「そうですよ。まぁこの話は置いといてミドリさんを成仏
するために今日は遅いから明日辺りおばあさんの病室に
行ってみましょうか」

〈え？でもこんな姿じゃあ……〉
「不安なのは分かりますがまずはおばあさんの様子を見に
行ってみましょう」
〈…そうだよね、うん分かった！〉

明日の用事が決まり時間も遅かったので俺たちは寝ることにした
だが朝ユーはミドリさんの話にずっと付き合っていたらしく
目に隈が出来ていて眠そうだった
それでもユーは一言も愚痴や文句を言わなかった

ユー！なんて優しい子!!

行ってらっしゃい、ミドリちゃん

翌日の朝、俺とミドリさんはミドリさんのおばあさんが入院している
病院にやって来た
学校？もちろんサボった
時間が何時までもあるとは限らないからなるべく早いほうが良い
〈お婆ちゃん……〉
ミドリさんは持ち前の明るい笑顔ではなく不安にまみれている顔になっていた
「大丈夫ですよ、きっとまだ間に合います」
そんな確証何処にもないのに俺はこの人のそんな顔が見ていられなくて
いつの間にかそんな言葉をかけていた
一瞬ミドリさんは少し驚いた様子だったがいつもの笑みになった
〈うん、そうだね。きっと大丈夫…〉
ミドリさんが落ち着いたところで病院に入って受付の人に患者の
長田さんの病室を尋ねて病室番号を聞き病室に向かう

病室の患者名は長田と書かれていた
目的の病室の前まで来てミドリさんを見ると緊張している様子だったが
俺の視線に気づいたミドリさんは大丈夫と首を縦に動かす
病室のドアをノックする
「はい、どうぞ」
中から了承が取れたので失礼しますとミドリさんと病室の中に入ると
ベッドで寝ているミドリさんのおばあさんがいた。
倒れたと聞いていたが体調は安定しているようでミドリさんは
おばあさんの姿を見て安心したミドリさんは今にも泣きそうな
顔をしていた。やはり俺の思っていた通りお婆ちゃんっ子のようだ
「あら、これは珍しいお客さんね。あなたは?」
「俺は星上院　志希、あなたのお孫さんのミドリさんの知り合いです。

これ、お見舞いの品です」
病院に行く途中の果物屋で買っておいたフルーツを差し出す
「ご丁寧にありがとう。…あなたはミドリちゃんの彼氏かしら？」
「いや、それはないです」
何となく言われそうな気がしたので即否定した
ミドリさんは〈そんな照れなくても良いのに〉と笑っていた
どうやら冗談を言える程度には回復したようだ
「ふふふ、面白い子ね。ずっとベッドの上で寝てばかりで
退屈だったのよ。ありがとね、お見舞いに来てくれて」
「俺なんかが来て暇が潰せたなら良かったです…
すいませんが今お孫さんがどうしてるか聞いてますか？」
一番にこれを確認しておく必要がある
これによってこの後の行動が決まる
もし知っているなら今のミドリさんの伝えたいことを
伝える必要がある
もし知らないのなら

数分前

「伝えなくて良いんですか？」

〈うん、私はお別れを言いたいって言ったけど本当にそれで
良いのかなって思って…私が本当に望んでいるのはお婆ちゃんが
元気になることだから、私が死んでるって聞いたら多分もう
笑顔になってくれないと思うから…それで…良いの〉

（これはミドリさんが決めたこと…どんな回答が待っていようとも

俺がとやかく言うことはない）
そしておばあさんが出した答えは

「…ええ、知っているわ」
！知っていたのか。正直まだ知らないものだと思っていた
ミドリさんは悲しそうな申し訳なさそうな顔をしており
お別れの言葉をお願いした
「そう、ですか…実はミドリさんの伝言を
「いいえ、その必要はないわ」預かって、え？」
必要…ない？それはどういう…
「聞かなくても私はあの子のお婆ちゃんだから
分かるの。ここにいるんでしょう？あの子は？」
「〈!!??〉
「見えるんですか？」
「いいえ、でもあの子はここにいる。ずっとあの子のことを

見てきたんだからそれぐらい分かるわ」
「あの子が私のことをどれだけ心配していたのかも、ね」
〈!?おばあ…ちゃん…〉
この人やっぱりすごいな…理屈じゃなく本気でミドリさんと
心で繋がってる
「だから最後の言葉はあの子自身から言って欲しいわ」
〈!?おばあちゃん!!〉
瞬間ミドリさんは泣きながらおばあさんに抱きつき
おばあさんはミドリさんを抱きしめ頭をあやすように撫でていた
〈おばあ、ちゃん!元気で、良かった!〉
「心配してくれてありがとね、ミドリちゃん」
〈もっと、はや、くに、これな、くてごめんなさい!〉
「別に良いのよ、来てくれただけでとっても嬉しいわ」
〈こんな、形であっ、て、ごめんなさい!〉
「辛かったでしょう?でもこんなになっても私のところに
来てくれて本当に嬉しいわ。ありがとうミドリちゃん」
実際には触れ合えていない、言葉は聞こえていない、

なのに二人の会話は成立している
本当にミドリさんのことを理解していないと出来ないことで
二人の家族のキズナが可能にしているのだろう
〈本当は、もっと、おば、あちゃん、と、いたか、った！
でも、もうこれ、で最後、だと、思うと、辛いよ！〉
「…確かに会うのは最後になっちゃうわ。でもねミドリちゃん、
別れっていうのは新しい出会いの一歩なの。今ここでお別れしても
ミドリちゃんが本気で会いたいと願ったなら、いつか出会えるわ」
〈願えば、出会える…〉
「ええ！おばあちゃんがミドリちゃんに嘘をついたことある？」
〈ううん、ありがとうおばあちゃん。これがお別れでも、
新しい出会いに向けて進んでみる！〉
そう言うとミドリさんの体から光の粒子が出て
同時にミドリさんの体が透けていく
この世に未練がなくなり成仏しかけているのだ
「それで良いのよミドリちゃん、もうミドリちゃんは
大丈夫。私も安心できるわ」

〈これまで心配ばかりかけてゴメンねおばあちゃん、
今まで私を育ててくれてありがとう!〉
「いいのよ、あなたは私の世界で一人だけの可愛い可愛い
孫なんだから」

見ていて家族とはどれだけ素晴らしく美しいか分かる
俺にもあんな家族がいたら何も知らずに平凡に生きられたのだろうか?
そんなことを考え柄にもないと思う
それに本気でそんなことを思えば俺の今までの１６年が何の意味も
持たなくなってしまう

それに俺にはユーがいる
俺はユーが側にいればそれだけでいい
そのためならどんな事でもやってやる
それが俺の唯一の生きる意味だから

…さて部外者の俺が水をさすわけにもいかない
星上院志希はクールに去るぜ
〈あ、志希君待って！〉
病室を出て行こうとするとミドリさんに呼び止められた
「どうかしたんですか？」
〈志希君だいなかったら私、おばあちゃんに会うことが
できなかったかもしれない。だからありがとう！
私をおばあちゃんのところまで連れて来てくれて！〉
「そんな大したことはしてませんよ。あなたが
おばあさんに会いたいと願ったから俺はほんの少し
手伝っただけですよ」
〈それでも私はあなたに感謝してる。…もう本当にお別れみたい〉
光の粒子が溢れるほどに出て行きそれに比例するように
ミドリさんの体も薄まっていく
〈志希君ありがとね、またどこかで会えたらいいね。
ユーちゃんによろしく！〉

「今度は生きて、俺の家まで来てください。ユーと
一緒にたくさんおもてなししますから」
〈ありがと！楽しみにしてるね♪〉
「行ってらっしゃい、またねミドリちゃん」
バイバイではなくまたね
それはまたどこかで再開することを意味している

ありがとう！
またねおばあちゃん！

その言葉を残しミドリさんは最高の笑顔で成仏した

俺は今、家に向けて足を進めている
あのあとおばあさんに加護を込めた呪符を渡しておいた
無意識に人外を引き寄せないようにする術式と
他の術から干渉されないようにする術式を施してある
本来なら裏に関係した者の関係者から裏に関することは
消しておかないと巻き込まれる可能性もある
だがあの二人のかけがえのない思い出は消してはいけない
それがあの二人にとってはきっと命よりも大切なものだから
だから俺は記憶が消されないようにあの呪符を渡した
俺が無かったものをなくして欲しくないから

だからこその闇討ちじゃないか

夜
人間でいえば仕事で残業をしたり社会不適合者たちが
遊びまわり、大人の遊びの時間である
そして同時に太陽の光が落ち暗闇の中唯一月の光だけが
輝き人間たちの時間だけでなく裏の者たちが動きだす
時間でもある
悪魔や妖怪等の異形の類は古来より夜の闇の中に紛れ込み
ひっそりと静かに人間たちを手にかけ喰らうものとされている
怪しげな事があるとすればそれはたいてい夜である

まぁそんなことはどうでもいいとして
お久しぶり　もしくははじめまして
普通の人間で高校生の星上院　志希です

さて皆さん問題です
俺は今何をしているでしょうか？
家で家事？学生らしく勉強？ゲーム等の娯楽？
恋人とイチャイチャ？
残念だがどれでもない
では何をしているか
それは……
ボオオオオオオ

絶賛廃教会で火遊び中です♪

ミドリさんが成仏してから次の休みの日
俺とユーはデパートで買い物をしていた
ユーもずっと家の中に居たら体に良くないだろうし
たまに買い物に付き合ってもらうという形で
一緒に外出するのだ
実際ユーがあまり家から出ないのはユーが他の勢力などに
見つかると厄介なことになるので結界に迎撃トラップ、
強制退去トラップ等を設置してありもはや要塞となっている
家で身を潜めているのである
でもさすがにずっと家では窮屈だしそんな閉じ籠るような

生活をしてほしくなくてこうやって外に出すのだ
ちなみにユーの恰好、銀髪に西洋の鎧に紫の服は目立つため視覚を誤認識させ周りの人たちからはいたって普通でかわいらしい女の子に見えるようにしている
「ユー、今日の晩御飯は何がいい？」
『今日は鍋がいい』
「鍋か、ならキムチ鍋か水炊きどっちがいい？」
『キムチで』
「わかったキムチだな」
必要な食材を見て回り品質を買い物で鍛えた観察眼で見極め質のいいものを選んでいく
「そういえばユー、何か欲しい物はないか？」
『そろそろお茶が切れるからお茶とせんべいで』
「それだけでいいのか？遠慮しなくても良いぞ」
『今のままで十分私は満足している。だから別にいい』
ユー・・・
なんて優しいんだ！

天使や！ここに天使がおる!!
（また何か変な事考えてる）
若干顔に邪念が出てしまいユーはそんな志希の内心を完全に
読んでいた

そして晩御飯と足りないものを買って補充し終えた
志希だがさっきの事でまだ納得できてはいなかった
（さっきはユーの可愛さで邪念が出てしまっていたが
やっぱり何か納得できないな。でもユーはあまり物を
欲しがらないからな。何か良い物はないものか…）
何ならユーは喜んでくれるか考えていながら
歩いているとあるものに目が入り良い案が浮かぶ
（あれならユーも喜ぶかな。やりがいがあるな）
ユーを喜ばせようとある事をする事をひそかに決意する
志希でありそのためにもある事を決行する。

そして数日後の休日
リビングでユーと一緒にテレビを見ているとあるものから
念話がきて呪符を取り出すと呪符が光っていた
〈志希様、今よろしいですか？〉
「ん？ああ、良いぞ」
念話の相手に許可を出し詠唱する
【我と契りを結びし十二の獣よ　我の導きに応え馳せ参じよ
十二支の子　ラット！】
詠唱をし霊力を流し込むと呪符はその場で浮き一瞬力強く光る
と呪符は小さな銀色の体毛に鉢金をしたネズミが現れる
「志希様、連絡がありますッチュ！」
言葉を話しこちらに敬礼をするこのネズミはラット。

俺の式神の一体であり戦闘能力はお世辞にも高いとは言えないが
こいつの長所は
「志希様の学友である兵藤が堕天使の目的であるシスターが
堕天使の女に襲撃にあい、堕天使はシスターを連れて例の
教会に帰還しましたッチュ！」
高度な陰形能力を生かした情報収集能力と
「教会の監視班から神器強奪の儀式を今夜決行するようですッチュ！
仕掛けはいつでも作動出来ますッチュ！」
統率された集団能力にトラップ等の多彩な仕掛けだ
この家に施されている術式以外の罠もラットのものだ
ラットに侵入出来ない所などなく結界が張られていても
よほどの術者でない限りラットの侵入には気付かない
こと潜入や情報収集ならラットの右に出る者はいない
具体的にどれぐらいの陰形かといったら例の
堕天使共とその手下の有り金を全部気付かれないまま
すり取り金目の物を目の前で奪っても気付かれない
ぐらいだ

そのおかげでこの前の甘味代と家計の足しになり
懐が大分温まった（^ ―^）v

「さすが仕事が早いな、わかった。
今夜堕天使共にあいさつしに行くか。他の奴にも伝えて
準備しといてくれ。後悪魔どもが動こうとしたらすぐに
知らせてくれ、また邪魔されたらさすがにウザい」
「分かりましたッチュ！」
『ラットはおりこうさん』
ユーはラットを指の先でなでラットはそれに目を細めて
気持ちよさそうにしていたがすぐにハッとなり
恥ずかしそうに出て行った
ユーはもう少し可愛がりたかったようで残念そうに
していた
ユーは可愛い動物が大好きだからな
代わりにミニ琥徹を出してモフモフさせると
表情に変化はないように見えるが嬉しそうだった

ラットには兵藤が悪魔になってから堕天使の動向と目的を探らせ
そして手に入れた情報を聞いたときは落胆した
少し気になっていた堕天使の目的は教会の聖女として崇められ、
最近魔女として追放されたシスター、アーシア・アルジェントの神器聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）
らしいが堕天使が開発した神器を強制奪取する儀式を行い、その力で
アザゼルとシェムハザの愛とやらを受ける事を企んでいるらしい
これだけ聞けば人外共にとっては面倒である人間にしか宿らない
神器を己の物にする事ができ、さらにそれが回復系のレアものであれば
出世間違いなしのように聞こえるがそう甘くない
宿主の命に深く密接している神器を強制的に奪取すれば宿主は
死ぬし神器自体も元の持ち主の物でないため能力も下がるという
デメリットがある
なによりここは魔王の妹が管理（笑）している町だ
こんなところに堕天使が侵入し行動を起こす事は最悪、

三大勢力の戦争の火種になりかねない
戦争嫌いのアザゼルにとっては迷惑極まりないことだろう
仮に戦争が起きなかったとしても堕天使が悪魔の領地（笑）で
行動を起こしたことで堕天使側に賠償を求められるし、
そんなことになればトカゲのしっぽ切りで簡単に見捨てられるだろう
素直にそのシスターを堕天使の加護化に入れておけば
神器マニアのアザゼルにとっては良い収穫になるし愛とやらは
受けられるかは分からないが報酬はもらえるだろうし上手くいけば
少しは地位も上がることだろう
全くバカなことである
だがチャンスでもある
そろそろ堕天使とはコンタクトを取りたかったところだしこのバカどもを利用するか
悪魔や天使みたいな能天気な奴らはどうにでも出来るが堕天使は別だからな
悪魔や天使なんかは貴族悪魔や教会の上層部を少し突っつけば不正や違法の所業が
ほいほい出てきて簡単に脅せるが堕天使はそう上手くいかない
他の勢力に比べて上層部がしっかりとしているため隙がない

悪魔や天使はいくらでもスキャンダルのネタが出てくるが堕天使はそれがない
堕天使は統率に力を入れてるし神器所有者に関してもほとんどは同意の下で
勢力に入れてるから今回みたいに強引な方がまだ少ない方だ
こういう末端の奴らの暴走はあるがそんなもんはなかった事のように消されるからな
だが今回は悪魔の妹の領地で問題を起こしたからな
そう上手くもみ消せるものでもないし簡単に済む話でもない
だから俺がその手助けをしてやる
その代償にちょっとした頼みごとをするだけだ
お互いに得しかないからアザゼルも提案に乗るだろう
後、あの堕天使共はむかつくという私情も入ってる

そして夜
ユーに晩御飯の用意をして少し早めの食事を取ってから
黒いローブと狐のお面をかぶり廃教会の近くの麓に
向かいラットと他のネズミ達は会議をしていた
「いいかッチュ!今回の我らの目的はシスターの救出及び
堕天使たちの捕獲ッチュ!くれぐれもつい殺したなんて
事がないように注意する事ッチュ!分かったかッチュ!」
チュチュー!!
「良い返事だッチュ!では先程伝えた通り動き何かあれば
すぐに連絡するようにッチュ!何か質問がある奴はいるかッチュ!」
「チュチューー!」
「何だ?言ってみろッチュ!」
「チュ、チュチュチュー・・・」
「バカやローッチュ!!トイレは先に済ませておくように
言っただろッチュ!仕方ないすぐに済ませて来いッチュ」
「チュチューー!」
「他に何か質問がある奴はいないかッチュ!」

・・・

「いないッチュね。なら作戦開始ッチュ！」

チュチュー!!

ラットの号令とともにネズミ達は敬礼しすぐに

散り散りになり持ち場へと向かった

そして廃教会へと向かうと雑な結界が張ってあったが

簡単に解除し気付かれないように侵入した

途中三匹の堕天使に出会ったが俺に槍を向け

投げようとした瞬間、ネズミ達が暗闇から姿を

表し薬で闇討ち（殺していない）し慣れた手つきで

運んで行った

え？戦闘能力は高くないんじゃなかったかって？

すごく低いですよ

だからこその闇討ちじゃないか　ニヤアアア

そんなこんなで廃教会の前までたどり着きました
あまりにも簡単にたどりついたので正直拍子抜けだった
見張りもさっき拉致った堕天使だけだったし
「ラット、悪魔たちはどうしてる？」
「監視班からの連絡ではもうそろそろ動くそうですッチュ！」
「なら動く前に終わらせるぞ」
「はいッチュ！聞いたかお前ら！悪魔どもが動く前に
さっさとやってしまうッチュ！救出班はどうだッチュ！」
「チュチュ！（今しがた救出したとのことです！）」
「よしなら遠慮はいらないッチュ！

各自火を放てッチュ！焼き払えッチュ！」
チュチュ――！
俺がラットに命じた例の仕掛けはいたってシンプル
教会の至る所に火薬を巻き一気に火をつけることだ

そして次の瞬間、廃教会は瞬く間に燃えだし炎に包まれた

良い子は真似しちゃだめだぞ！

ゆえに俺は悪くない！

アーシアside

私は昔、物ごころつく前に親に捨てられ教会の人が
私を拾ってくれました。少し貧しい生活でしたが、嫌だと
感じた事はありません。毎日私たちが生きていけるのは主の
おかげ、そう教えられた私は毎日心からお祈りをしていました。
ある日、怪我をした人がいました。私はどうにかこの人の怪我を
治したいと強く願うと手から光が溢れ傷口に触れると瞬く間に傷が
消えて行きました！
それから私は人を癒す事の出来る聖女として崇められました。
でも、私は聖女になったことにあまり嬉しくありませんでした。
どこに行っても私には聖女の肩書が付き、お友達も出来ず、
「聖女としての私」はみんな優しくしてくれましたが「私」は
一人ぼっちでした。でも、これもきっと主が私に与えて下さった
役目だと思い笑顔で祈り続けました。

そんな時、一人の悪魔の男性が倒れていました。悪魔は敵だと
教わりましたが、それでも目の前の苦しんでいる人を見捨てることが
出来ず悪魔の男性を癒しました。
そこを教会の人が見ていました。
私はその日を境に教会の方から冷たい眼で見られて言われました。
「忌わしい魔女」、と
私のこの力は悪魔をも癒す力だということでたくさんの人から
責められました。かつては私を聖女として慕ってくれた方たちは
裏切られたような眼をして、他の人以上に私を罵倒しました。
誰も私の味方をしてくれる人はいませんでした
辛くて泣きたくて仕方ありませんでした
それでも私はこれは主が与えた試練だと信じ、信仰が足りなかったのだと
祈り続けました。
私はそれからすぐのこと、東側にある日本という国の教会へと
派遣され、堕天使のレイナーレ様の下で暮らすことになりました。
でも、現地で迷子になってしまい、誰かに助けを求めても日本語が
分からない私を現地の人たちは避けて行きました。本当に自分は

ダメだなと思っていた時、ある男の人に会いました。
イッセーさんという方で言葉が通じて案内をしてくれました。
初めて本当の意味で優しくしてもらった私は嬉しくて仕方が
なくてこれも主が私に与えて下さった愛だと感謝の祈りを捧げました。
そのあとイッセーさんが悪魔だと知りました
あんなに心の優しい人が悪魔だなんて信じられませんでしたが、
それでもイッセーさんは優しいイッセーさんでした。
おいしい食べ物や、遊びや物など私の知らない楽しい世界を
イッセーさんはたくさん教えてくれました。
私はこの時生きてきた中で一番幸せでした
でもそんな時間ももうすぐ終わってしまうと思うと、
すごく悲しいです
レイナーレ様に教会に連れ戻された私は牢屋に入れられました

きっと私はこの後死ぬのでしょう
死ぬのは怖いです

でも最後にイッセーさんのような優しい人に出会えてよかったです
もし叶うなら最後にもう一度

もう一度だけ

イッセーさんとお話がしたかったです

でもそれは欲張りになっちゃいます
だから
「主よ、イッセーさんにどうかご加護を」
私には祈ることしかできません

チュチュ？
祈りをささげていると不意に私以外の何かの声が

聞こえました。
それはネズミさんでした
ネズミさんはトコトコと私の所まで走ってきてその
小さな目で見上げてきました
「はぅ～、可愛いです！」
ネズミさんを手のひらに乗せ指先で頭をなでると
気持ちよさそうにしてました
それを見るとさっきまで沈んでた心が少しだけ
楽になりました
チュチュ？
「あ、こっちにもネズミさんが！」
チュチュ？
「こっちにもいました！」
チュチュ？　チュチュ？　チュチュ？

「「「「チュチュ？」」」」

「は、はわわわわわ・・・!?」
ネズミさんはどんどん出てきて気付くと牢屋の中
いっぱいにネズミさんが集まってました！

「チュチュチュッチュ―!!」

「「「「チュー!!」」」」
「え？ネ、ネズミさん！一体どこに行くんですか！」
ネズミさんたちはそのまま私を持ち上げいつの間にか
鍵が開いていたドアを通って運び出されました

はわわわわわ、わ、私、どうなっちゃうんですか～！

レイナーレｓｉｄｅ
ついに、ついにここまできた！
上の連中をだますのは苦労したけどおかげで
私はあの子の神器を手に入れ至高の堕天使になる事
ができる。
これで今まで私をバカにしてきた奴らを見返す事が出来る
そして私はアザゼル様とシェムハザ様の愛を受けられる
後はこの地を治めているゲスな悪魔たちの邪魔さえ
なければ上手くいく
でも抜かりはない
部下の堕天使が三人に雑魚とはいえ１００人ほどの
はぐれ祓魔師（エクソシスト）も集めてるから儀式終了までの
時間稼ぎにはなる
フフフ、せいぜい私が至高の存在になるための捨て駒に
なることね

・・・それにしても

「何かしら?・さっきから変なにおいがするわね。

たく、これだから廃教会は…綺麗にしときなさいよね」

せっかく気分がよかったのにさっきから臭う異臭に

台無しだわ

心の中でそんな悪態をついてた次の瞬間

教会の中は一瞬で炎に包まれていた

志希ｓｉｄｅ
お待たせしました！ようやくこっちサイドです！
メタい？細かい事は気にしないように

ラットたちが火を放って数秒もしないうちに教会は
完全に炎に包まれている
闘わずして勝つ
これこそ真の闘い方というものだ！
汚ない？
目的のために効率のいい戦術を使って何が悪い！
それにここには結界がしてあるから一般の人には
いつも通りの光景にしか見えないし音も聞こえないから
地域の人たちには何の迷惑もかからない
逆にここで真正面からドンパチする方が下手したら
下の方に居る方たちに迷惑がかかる
早期決着、誰の迷惑にもならない
ゆえに俺は悪くない！

と、教会が燃えてるのを眺めていると正面のドアが壊れ
中から白髪の神父が転がり出てきた
「危ねぇ危ねぇ、もうちょっとで黒こげになるところ
だったじゃねぇか。全く教会に火を放つなんてイカレタ奴も
いるもんですねぇ～、いや～恐ろしい」
「それは悪かったな、なんせ堕天使なんていういかにも神の
敵が教会に居座ってるもんだから一緒に焼いた方が
教会の為と思ったもんでねぇ」
白髪の神父に話しかけると俺の存在に気付き神父は即座に
戦闘態勢にはいる
「おやおや～、あんた誰ですかい？あんたが教会に
火を放ったのかなぁ～？」
「さっき答えたはずだけど？」
「それもそうですねぇ～、にしても教会に火を放つなんて、
その悪趣味な仮面と同じぐらいあんた結構イカレテやがり
ますねぇ～。ママに火遊びはしちゃいけないって

教わらなかったんですかい？」
「自分の邪魔をする奴には私刑にかけようが何しようが
許されるというのが母の教えでね。それにこのお面は結構
気に入ってるんだがな」
「おっとそいつは失礼、それにしてもそんなイカレタ
母親とはすんばらしいですねぇ～」
「素敵な皮肉をどうもありがとう。で、お前はどうする？
俺と闘うか、それとも逃げるか？」
「おや、俺ッちを捕まえようとはしないんですか？」
「俺の目的はお前じゃないし、俺は人間には比較的
優しいんだ」
白髪は少しの間悩んでたが手に持っていた武器を
おろした
「そんじゃお言葉に甘えて逃げさせて頂きましょうかねぇ。
本当はここに来るだったんだろうクソ悪魔たちを
チョンパしたかったんですがねぇ。この状況じゃ
俺ッち的には分が悪いっすわ！」

「賢明な判断だな。そのイカレタような性格さえ
どうにかすれば長生きするぞ？」
「忠告は有り難く受け取っておきますぜ。じゃ、バイチャラ☆」
神父が逃げていくのを確認した後、教会が完全に崩れ落ちた

すると燃え盛る瓦礫の中から堕天使がせきこみながら
出てきた

「ゲホッゲホッ！一体、誰がこんな、ゲホッ！真似を！」
「俺の仕業だが？」
「ッ！貴様か！人間の分際でふざけた事を！死ね!!」
俺の存在に気付き人間だと分かるやすぐに怒りに任せて
光の槍を投げてきた
が
「ああ、そんなもん無駄だから」
俺が展開している結界に当たると光の槍は簡単に砕け散った
「何ッ！結界か！小賢しい真似をして、とっとと死になさい！」

「やらせるわけないだろうがッチュ！」
　近くに隠れていたラット達が一斉に堕天使に飛びかかり
　一瞬のうちに簀巻きにした
「な、何!?いったい何が！」
「ほらどうした？俺を殺すんじゃないのか？」
「クソ！早くほどきなさい！殺すわよ！」
「ほどいても殺すんだろう？そんなんでほどくバカが
　いるわけないだろうが」
「人間ごときが、この至高の存在である私にこんな
　事をしてただで済むとでも「うるさい」むぐぅ！」
　あまりにもやかましかったので猿轡をかける
「むぐ！むぐむぐぅ！むぐぅー！」
「まだうるさい、めんどくさいな」
　堕天使はいまだに殺意のこもった目でこちらを睨んでおり
　芋虫のようにはねていた
「むぐぅ！むぐ〈ピタッ！〉む・・・」
　あまりにもうるさかったため幻術作用の術式の札を

はって黙らせた
さてと、後はこいつを運び出せば終わりだな

でもその前に
お客さんの相手をしなくちゃな

「あなたは一体誰かしら?こんなところで何をしているの?」
声がする方には真っ赤な髪をした俺の知っている人物であり
俺が一番嫌いな種族である悪魔のリアス・グレモリーとその
眷属がいた

「やぁ無能な悪魔さん達、こんばんわ。

ただの放火魔ですが何か？」

あまりのバカらしさに

イッセーＳＩＤＥ

暗い夜の中、俺と木場と子猫ちゃんはこの町にある廃教会へと急いでいた

目的はアーシアを堕天使たちから助け出す事

アーシアとはたまたま公園で会って、初めての場所で教会の場所が分からず困っていたため

放っておけず案内をしてあげたのだ

最初は金髪美少女シスターと一緒にいられる!!って喜んでたけど…

アーシアも俺と同じで神器を持っていた

それは癒しの力を持っていて怪我をしている子を治してあげたのだ

だが、その力で教会から聖女として崇められていたのに、悪魔を助けてあげただけで魔女と罵り教会を追放したらしい

こんなに優しい心を持っていて、頑張っていたアーシアを勝手に聖女に仕立て上げたくせに少しでも自分たちの

思っているものと違ったら切り捨てるなんて勝手なことに、ふざけるな！と心の底か

ら怒りが湧きあがった
アーシアは聖女だったから友達がいなくて寂しいと言っていた
だから俺はアーシアと遊んで友達になった

これからも面白い事を、楽しい事を教えてやるって言ったのに

なのに

俺が弱いせいで、アーシアは堕天使にさらわれた
俺が怪我したせいで、アーシアは堕天使の所に戻ってしまった
俺のせいで……

俺はアーシアを助けたい
部長と口論になって、ダメだと言われても出来なかった
俺は友達を…アーシアを見殺しにする事なんて出来ない
一人でもアーシアを助けに行こうとする俺に、木場と子猫ちゃんは手伝ってくれる事になった

正直、木場はイケメンでモテるから気に入らなかったけどこんな俺のわがままに付き合ってくれる二人に俺は感謝しか出てこなかった
そして教会へと向かっていた時

いきなり教会が炎に呑みこまれた
本当に突然の出来事で俺たちは燃え上がる教会を遠目に見ながら呆然としたが、すぐにアーシアがあそこにいる事を思い出した
「…ッ!アーシア!!」
全力で教会に走る
坂や階段を上り、一直線に向かう
息が切れ、呼吸が辛くなってもアーシアの事を思い、立ち止まる事なく走り続けた
そしてやっと教会の前まで到着するとそこには三人の人がいた
「部長!姫島先輩!」
「イッセー!」
そこにいる三人のうち二人に俺が声をかけると二人は俺に気付く
こっちに視線を向けていたのを部長と姫島先輩はすぐに視線を戻した

その視線の先には残りの一人が佇んでいた
体全体を覆う黒いローブを纏っていて身長以外の身体的特徴は見えず、顔は狐のお面を被っているため
顔も分からない
男なのか女なのかさえ分からない、いかにも怪しい奴が燃え上がる教会を背に俺たちと対峙していた

志希ＳＩＤＥ
「やぁ無能な悪魔さん達、こんばんわ。ただの放火魔ですが何か？」
ここへとやってきたこの駒王の管理者（笑）であり、魔王サーゼクス・ルシファーの妹である
リアス・グレモリーとその謇族の女王（クイーン）である姫島朱乃に俺は開口一番に喧嘩を売るよ

うな
一言を渡した
それに顔をしかめるグレモリーは言葉を返す
「ただの放火魔が何故こんな廃れた教会で火遊びなんかをしてるのかしら？ひょっとしてこんなちゃちな事をして快楽を得るような小物さんなのかしら？」
「私がそんな小物に見えると言うなら、君の眼は節穴ということになるな。私はただ、ここにいる烏共が気に食わなかったから少しお仕置きをしてやろうと思っただけだよ。意外にもあっさりと終わってしまったものだから、つまらないものだったけどね」
「そう、それは残念ね。それで、あなたは何者なのかしら？何が目的？」
「君はさっきの話を聞いていなかったのか？最近の悪魔は記憶力も悪いらしいな」
「つまらない冗談はもういいわ。とっととこちらの質問に答えなさい」
「せっかちな悪魔だな。それに会って間もない人物に命令するとは…流石は悪魔と言ったところか？」
俺の皮肉や挑発に見て分かるくらいにどんどんグレモリーの眉間が寄って行き、険悪な雰囲気になっていく
だが、それでいい
こういうふうに相手を挑発し、イライラすればするほど冷静な判断が出来なくなる

そうすれば万が一、いや億に一でもヘマをしたとしても気付かないだろうし、逆に相手がヘマをすればこちらの得となる
「まぁ、話すにしても話さないにしても、そろそろ来るお客も一緒の方が手っ取り早いだろう」
「部長！姫島先輩！」
俺が言った直後に兵藤の声が聞こえてくる
「イッセー！」
そこでグレモリー達も兵藤たちの到着に気付くがすぐにこちらに視線を戻す
後からやってきた兵藤は燃える教会と俺という怪しい奴に困惑し、木場と塔城はグレモリーのそばまで行き
拳と剣を構えて、警戒態勢に入る
「そんな露骨に警戒されると私でも傷つくんだがなぁ」
「そうかしら？全然そんなふうには見えないけれど」
「それは君が悪魔で、見る目がないからじゃないのかね」
「何だとてめえ!!俺たちの部長に見る目がないわけないだろ！ふざけた事言ってんじゃねえ！」
グレモリーに対して言った皮肉に兵藤が反応して突っかかってくるが、仲間がそれも

自分たちのキングであるグレモリーがバカにされるという事は自分たちもバカにされているようなものだからなぁ

残りの奴らもあまり顔には出さないようにはしているが、明らかに怒りが見える

まぁ、兵藤はそんな事とは関係なく怒っているんだろうが…兵藤らしいといえば兵藤らしい

これで悪魔でなければ……イヤ、今さらこんなことを思うだけ無駄か

「自分たちのキングに対する忠義心は関心するが、いいのかな？君は私に用があって来たわけではないのだろう」

「！そうだアーシア！アーシアァァァァァ!!!」

「兵藤君ダメだ！もう火が回っている！中に入る事は出来ない!!」

「離せよ木場！アーシアが、アーシアがまだ中にいるかもしれないんだぞ!!俺はアーシアを助けに来たんだ！行かせてくれ木場！」

既に火が回り、火の柱と化している教会に飛び込もうとする兵藤を木場が抑え込んで止めるが、それでも中にいるだろう者を助ける為にそれを振りほどこうとする

「友達になるって言ったんだ、アーシアは俺の友達で守るって言ったんだ。だから、アーシアを助けなきゃなんねえんだよ。なのに…なのに…俺は何も出来なくて、今度こそ助けようって…思ったのに…俺は…」

そのまま兵藤は膝をついて、声を押し殺し拳を握りしめ嗚咽をもらす
今兵藤の心中は自分の無力さと原因となった堕天使、そしてこの世の理不尽さに怒りアーシア・アルジェントへの後悔が渦巻いていているのだろう
他の奴らも兵藤の心を察して目を伏せる者、共感する者、自分の不甲斐無さに歯をかみしめている者など
全員が兵藤の事を心配する奴らだって事は、第三者が見ればほとんどの者は分かるだろう

だが

「フフフ……ハハハ、ハハハハハ……」

そんな事をしているこいつらを見ていると、本当に

「ハハハハハハハハハッ!!アハハハハハハハハハハハッ!!!」
あまりのバカらしさに笑えて来てしまう
俺は耐えきれず仮面越しに顔を抑えて大笑いする

「何を笑っているのかしら？私の可愛い下僕を笑っているのだとしたら、その罪、万死に値するわよ……！」

当然こんな場面で笑えば、誰でも喧嘩を売っているようなものだろう

グレモリーが俺の事を不愉快なものを見るように体に滅びの魔力を迸らせながら睨んでくる

他の奴らもこちらを敵意たっぷりの目で睨んでくる

「ハハハハハハハ、こ、これが笑わずにいられるか！お前らの道化っぷりは、ハハ、本当に笑わしてくれる！」

「こんな事になったのも、全ては貴様たちの無能さが招いたことだろう。そこで無様に醜く這いつくばっているガキが言っているアーシアというのは、堕天使たちのお目当てだったシスターの事だろう？」

その言葉に兵藤がピクリ、と僅かに反応する

「哀れな少女だったものだ、神をあれほど信仰し敬愛し教会に尽くしてきたというのに簡単に捨てられ、

堕天使に拾われ呆気なく生を終えたのだからな。いやはや、あまりにもちっぽけなものだ」

ギリッ、と歯がきしむ音がした

そうだ、それでいい

「神に見放されたのもうなずけるな。聖女でありながら、悪魔を癒すだけでなく友達になるなど。完全な背信行為だ。そんな者が聖女にふさわしいわけがなかったということだ。結局彼女はその程度の者だったということだ」

「…ま、れ……だまれ……」

僅かに声が聞こえてくる

そろそろ、いいころだろう

最後に締めの一言をくれてやる

「彼女には何の価値もなかったということだ。イヤ、最後には命と共にその能力で誰かの役には立てたから少しは価値があったのだろうな。逆に言えばそれ以外に価値がない無意味なものだったのだろうがな」

その言葉が

「黙りやがれえええええええええええええッ!!!」

兵藤の怒りの最頂点を突破させた

「好き勝手言ってんじゃねえぞ手前!!アーシアはな…アーシアは誰よりも優しい子だったんだよ!!

アーシアの事を何も知らない奴がアーシアの事をバカにすんじゃねぇ!!」

「バカになどはしていない。客観的に見て彼女の行動がどれだけ愚かであったかを述べただけだ。

それに優しい事は良い事かもしれないが、それが逆に彼女をそんな目にあわせたのではないか?」

「ッ!…確かにアーシアの優しさが自分を苦しめる事になったのかもしれねぇ。でも、

アーシアは自分がどんなひどい目に遭っても、どんなに辛い事があっても耐えてきたんだ！そんなあの子の事を…アーシアを
バカにするんじゃやねえ!!!」
そう叫ぶ兵藤の左手に赤い篭手の神器が現れる
形状から見たらそれは『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』、持ち主の力を倍にするありふれた神器である
だが、今の兵藤の神器からはそんな低級の神器とは思えないほどの力があふれている
「ウオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォオオオ!!!」
『Dragon Booster!!』
兵藤の咆哮と同時に神器の宝玉が光り輝き、形が変化する
そしてその篭手の宝玉には龍の紋章が刻まれていた
それを見て、俺の推論が確信へと変わり、仮面の内側で口元に笑みを浮かべる
面倒な事をした甲斐があったというものだ
「てめえは俺が、ぶっ飛ばす!!!」
『Explosion!!』
俺に突っ込みながら神器を発動させ、あと少しで殴られるというところで

「イッセーさ～ん！」

気の抜ける穏やかな声で兵藤を呼びかける者がおり、反射的に兵藤がそっちを見ると

「イッセーさ～ん！何してるんですか？」

ラットと部下のネズミ達に囲まれて戯れているアーシア・アルジェントの姿があった

「えええええええええええ!!??」

いきなりの事に兵藤は驚き、脚を躓きその勢いのまま地面へと顔からダイブする事となった

その様は無駄であるが、一切無駄のない綺麗なダイブであった

塵も残さず消し飛ばしてやるわ!!

やぁ皆さん　おはよう、こんにちは、こんばんわ
高校生で霊能力者で放火魔で悪魔嫌いな星上院　志希だ
好きなものは悪魔の間抜けな顔と絶望した顔
もっと好きなものはユーである
今俺の眼に映る光景にはちょうど先程言った好きなものである悪魔たちの間抜け面があった
いやぁ愉快愉快！
まぁ死んだと思ってた奴がこんな突拍子な形で出てきたらこうなるわ
それにしてもほんとに裏の世界の住人である悪魔とは思えないな
ああ、別に人間っぽい反応とか感情があるからとかではない
こいつらの能天気振りに心底呆れているのである
確かに聖女がこんなふうに出てきて驚くのは分かるが、それで少しでも警戒を解くとかこいつらバカだろ
おかげで傍観者も含め簡単に術式にはまった

片手を上げて合図を出すと聖女の周りにいたネズミ達は四方八方に散り散りになりそのうちの一匹である
ラットは俺の下に来て袖から懐に入っていく
暫くたってようやく我に返った悪魔どもはこちらを再度警戒する
兵藤はそんなことも忘れて聖女に抱きついていたが、聖女も顔を赤くしながらも兵藤を受け入れていた

チッ！リア充見せつけんじゃねえよ！

内心毒づきながらももちろんそんな所は悪魔どもには一切悟らせていない
「さっきのネズミ達はあなたの使い魔かしら？こちらとしてはイッセーが助けたかった子が無事なのは
嬉しいけどそれ以前にあなたの目的はなんなのかしら？」
ふむ、それぐらいの頭は回るようだ
まぁこんなのも分からなければ裏の住人として落第どころか退学者だからな

分からない読者たちの皆さんには解説しよう

俺はここにいた堕天使たちを無力化して聖女を助け出した
この時点で悪魔たちから見れば俺は堕天使に恨みをもつものか聖女自身に用があるとみる
聖女を助ける理由としてはここにいた堕天使たちと同じく聖女の神器に目的があったとみるだろう
だが俺は簡単に彼女を引き渡した
この時点で神器に興味があるという事は可能性が低くなった
そしてもう一つ、俺の悪魔嫌いな言い方
これで俺が悪魔に対してあまりいい印象ではない事がわかる
そして他にも不明瞭な事もある
俺があれだけ聖女の事をバカにしていたくせにそれを助けていたのだ
おかげで彼らは兵藤の神器の覚醒を得る事が出来て嬉しいものなのだがなぜそんな事をわざわざしたのか?
だとすれば俺が兵藤の神器に興味があってわざと怒らしたと考えるのが普通だろう
自分の眷族に少しでも危険があると言うのならそれを警戒するのが妥当だ
こんなこと裏の者ならバカ以外なら気づくだろう

まぁ全然目的は違うんだけどな

「私がそんな事を答えると思っているのかね？なら君の頭は想像以上に愉快なようだな。

私もこれ以上ここにいる意味もないのでこの辺で帰らせてもらおうか」

「あら、それは残念ね。この地を治める者としてはあなたのような得体の知れないものを

放っておくわけにはいかないわ」

そういうと同時にグレモリー眷族が俺を囲む

兵藤は遅れて場の雰囲気に気付き聖女をかばうようにしていた

「素直に白状してくれるのであれば手荒な事はしないで済むわよ」

「どうだかな。私が何者か分からない時点で私は捕縛されるか、場合によってはここで始末されるだろう。

そんな危険があると言うのに君たちに黙って従うと思っているのかね？それにその物言いだと私などどうにでも出来ると言ってるようなものだが、ずいぶんと自信があるようだな」

「…その余裕な態度、いつまでもつか試してあげましょうか？祐斗！」

「はい部長！」

学園の金髪爽やかイケメンでありグレモリーのナイトである木場は自身の神器で製成した魔剣を手に高速で
斬りかかってくる
縦に横にそこそこ筋の良い剣技だがそれを全て刀身の峰を叩く事で軌道を逸らす
「そこです」
俺と木場が攻防してるその上空から学園のマスコットであり白髪ロリッ子の塔城子猫が踵落としをする
俺は片手で木場の剣をいなした後迫る塔城の脚に手を添わせてまわす
するとひとりでに塔城が空中で回転し木場に向かっていく
「何!?クッ!」
振りおろそうとしていた剣を手放すことで塔城をバッサリ斬る事はなくなったがそのまま塔城が腹に
突っ込んでくるのをもろに受け、後方に飛ばされる
何が起きたかは簡単だ
剣も拳もどちらも一直線に力の向きが向くがそれを横から別の力を加えたら力の軌道はずれる
塔城のはそれの応用で故意に力の向きを変えて木場に向かわせたのだ

簡単に言うが力の軌道を完全に読み適切な力、向き、タイミングを計算しなければならないので
失敗すればあの世行きだ
「ならこれならどうです？ハァ!!」
近距離は分が悪いと判断した二大お姉さまの一人、大和撫子の姫島朱乃は雷撃を落としてくる
結界で十分防げるレベルであるが出来れば手の内は見せたくないため木場が手放した魔剣を拾い上空に
投げて雷撃にぶつける事で避雷針代わりにする
姫島が驚愕してるが別に驚くほどの事でもないと思う
戦いにおいては何を使っても良いのだから少し考えればこれぐらいは猿でも出来る
それすら出来ないこいつらはまぁ猿以下ということになるが
「消し飛びなさい!!」
正面に構えていたグレモリーが滅びの魔力を放ってくる
おい、完全に殺す気満々じゃねえか。話聞く気ゼロだよこいつ。
しかも真正面から放つとかこいつどんだけ自分の力に過信してんだよ。
特性上滅びの魔力は高いアドバンテージを誇るがそれも使い手の技量によるものだ。

だからこそ現魔王であるサーゼクスはその特性を把握しきり最大限にその力を引きだしているが
こいつのはただの力任せの攻撃で滅びの魔力の特性に頼り切っているだけだ
この程度なら片手間で防げるがこれだけ派手な攻撃だから利用させてもらおう
俺は待機状態だった術式を展開し、そして
ドス黒い魔力の波動に呑みこまれた

「やった、のか?」
兵藤一誠はそんな自分の言葉に自信がもてなかった
確かに自分の主であるグレモリー眷族の戦いを見るのが初めてで素人が見ても凄まじいものであったが
あの余裕たっぷりでなにもかも見通してるかのような言い方をする黒衣の仮面がこ

んなあっさり
　やられたのか疑問で仕方なかった
「妙ね、あの程度でやられるような奴には見えなかったのだけれど？」
「ですが、どこにも姿はありませんわ」
「それに避けたそぶりもありませんでした」
　黒衣の仮面が立っていた所にはまるでその部分だけ綺麗に切り取ったかのようなかなり大きめな
　クレーターと黒衣の仮面が纏っていた黒衣の切れ端だけが残っており周囲には何もなかった
「部長、やはりこの辺りにはどこにもいませんでした」
「そう、口だけの奴には見えなかったけれど…一応みんな警戒を解いてはダメよ」
　はい！と元気よく答える眷族を尻目に見た後、アーシアに近ずく
「アーシア・アルジェントね。私はリアス・グレモリー。そこのイッセーの主よ」
「は、はい！アーシア・アルジェントと申します！あの、あなたも悪魔さんなのですか？」
「ええ、そうよ」
　そういって背中の蝙蝠のような翼を出し少し見せてからしまう
「アーシア・アルジェント、アーシアって呼んでいいかしら？」

「は、はい。構いませんけど」
「そう。ならアーシア、提案があるのだけどいいかしら?」
「提案ですか?」
「ええ。あなた、悪魔になってみる気はない?」
「あ、悪魔にですか!?」
「部長!どういうことですか!」
「落ち着きなさいイッセー。
　貴方のその神器はとても貴重なものだというのもあるけど私の眷族になれば他の勢力から下手に
　狙われる事はなくなるわ。どうかしら?」
　そう言われてイッセーは黙る
　確かにまたアーシアを狙う奴が来てもおかしくはない。部長の眷族になれば部長に守ってもらえる。
「……」
　しかしアーシアは暗い顔で俯いており返事を返せなかった
「やっぱり、悪魔になるのは抵抗が有るかしら?」
「い、いえ!そういうわけではありません!悪魔さんの中にも良い人がいると言うのは

分かりましたし！
でも、悪魔になってしまったらもう主に祈る事が出来なくなると思うと、少し…」
アーシアは生まれてから教会で育てられそのあとは聖女として崇められていたため主にその身を捧げ
祈るという信仰で生きてきた
今まで行ってきた自分の人生ともいえる事が出来なくなる事にやはり抵抗があるようだ
「悪魔になればずっとイッセーと一緒にいられるわよ」
「ッ!?なります！私、悪魔になります！」
だが、それはリアスの悪魔のささやき（例えでなくて）によってもろくも堕ちた
イッセーはいきなりのアーシアの変わりように困惑しているだけだった
「決まりね。それじゃ今から貴方に悪魔になるための儀式を行うわ。残っているのはナイト、ルーク、
ビショップだからアーシアはビショップね。それじゃ始めるわよ」
「はい！宜しくお願いします！」
その言葉にリアスは頷き紅いチェスの僧侶の駒を取り出す
「我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。いま再び

我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が『僧侶』として、新たな生に歓喜せよ!」

詠唱を終えると僧侶の駒はアーシアの体に入り込み完全に取り込む

「みんな!新しい私達の仲間のアーシアよ!」

「あ、アーシア・アルジェントです!これから頑張りますので宜しくお願いします!」

頭を下げるアーシアに部員たちは快く受け入れていた

兵藤に至っては金髪美少女といられると大喜びしている

「それじゃあ新しい仲間も出来た事だし帰ってパーティでもしましょうか?」

そういいその場を華麗に去ろうとするが

「あ、あの部長。ちょっといいですか?」

「?なにかしらイッセー?」

「背中に、紙が……」

「紙?」

そう言われてリアスは背中に手を伸ばすと紙がありそれを取り内容を読む

『今日はこれで失礼させてもらう　紅髪の無能姫　どうやら君は頭だけでなく背中も能天気のようだね』

この紙をずっと背中に貼られていたという事は先程までリアスがアーシアを勧誘していた時も儀式の時も
ずっとこの紙が貼られていたということであり眷族達はそれを見ていたということである
眷族達もリアスが凛々しそうに勧誘していたため言いだせなかったのだ
つまり決めシーンが間抜けな恰好であったのだ
書かれていた内容を読んだリアスはピクリとも動いておらず眷族たちはそれを尻目に見て不安に思う
「あ、あの部長？」
イッセーがリアスに話しかけると同時にリアスの体から滅びの魔力が吹き荒れ持っていた紙は跡形もなく
塵に還った
「フフ、フフフフフフ……」

不気味に笑うリアスに眷族達は悪寒を感じる

「あの仮面男、なめた事をしてくれるじゃない…!次に会ったら塵も残さず消し飛ばしてやるわ!!」